

江利チエミ、美空ひばり、雪村いずみ……
元祖三人娘の中で、たった一人
歌声を響かせ続けるいずみ
コンサートでは2人の歌を唄う

文 山川智

張った声は金属質のようだった
声質はポピュラーやジャズには最適だった
1937年に生まれ、
デビューは1952年、16歳であった
目鼻立ちがくつきりした容貌は魅力的だった
ひばりやチエミの和風な顔とは異なった顔
いずみは近代的な個性を醸し出していた
『青いカナリヤ』『マンボ・イタリアノ』
『チャチャチャは素晴らし』……
楽曲は洋風で小刻みなヒットを続けた
だが、いずみは飽き足らなかつた
1959年初渡米、ダイナ・シヨアの人気番組
『The Dinah Shore Chevy Show』に出演し、
シャリー・マクレーンと共演、絶賛を博した
以後、度々渡米し、1年間で全米12都市で公演
1961年4月には『LIFE』誌の表紙を
日本人芸能人として初めて飾った
チャーミングな歌手から、社会派へも脱皮した
7分弱の反戦歌『約束』は、『ヨイトマケの歌』と
共に日本のメッセージソングの草分けとなった
女優としても画家としても才能豊かだった
いずみは78歳の今も活躍し、日本歌手協会の
相談役もこなすマルチぶりを発揮する



人気絶頂期の雪村いずみ
(1958年)

昭和歌謡 誕生物語 【第26曲目】

— 想い出のワルツ —

雪村いずみ

本名の朝比奈知子から「トンちゃん」の愛称で親しまれたのが、昭和の歌姫と言われた雪村いずみである。

雪村は昭和28年（1953）、当時アメリカで一世を風靡していたテレサ・ブリュワールの『Till I waltz again with you』をカバーした『想い出のワルツ』でビクターからデビュー。いきなり20万枚の大ヒットを飛ばし、スターへの道を駆け上った。

当時まだ16歳。とはいえ、その歌声が当時21歳だったブリュワーより大入びで聴こえるのは、やはり持つて生まれた天賦の才能か。

その後も『オウ・マイ・パパ』や『はるかなる山の呼び声』『マンボ・イタリアノ』とカバー曲を立て続けにヒット。同年代の少女歌手である江利チエミ、美空ひばりとともに「三人娘」の一人として、絶大な人気を得るようになる。

彼女らは大の仲良し。特にいずみとチエミとは親友だったが、その理由がふたりにあった、ある共通点だった。

いずみは9歳の時に父を自殺で亡くし、母が経営していた映画会社が倒産。生活が困窮したことで高校進学を断念し、家計を助けるために中学卒業後歌手として新橋のダンスホール「フロリダ」で歌手活動をスタートさせた。チエミも同じで、つまり、皮肉なことにふたりとも歌手になるきっかけは「生活

を支えるため」だったのである。

昭和31年（1956）のNHK紅白では胃瘻瘻で出場できなくなっていたいずみの代役にチエミが立ち、出場者が付ける赤い花をふたつ胸に付けて歌ったこともあった。

三人娘の別れは突然やってきた。チエミが45歳で死去。平成元年、ひばりも52歳で天に召された。ふたりの最後に立ち会うことができなかつたいづみは、「チーちゃん」ときは北海道、お嬢のときは神戸にいて会えなかつた……ふたりとも本当にごめんね」と号泣したという。以来、いずみはふたりの思いを受け継ぎたいとコンサートでもふたりの持ち歌を歌うようになった。

ちなみに『想い出のワルツ』も『テネシーワルツ』もタイトルにワルツという名前がついているのに、リズムは3拍子ではなく4拍子。ま、それも時代だったのだろう。

ともあれ、亡くなったふたりが歌にかけた情熱と思いは、雪村いずみの歌声とともに、これからも日本人の心の中で生き続けていくことだろう。

山川智 ● 1962年東京生まれ。テレビ制作会社、週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の涙』『東方神起 J・Y・Jを行く』（共にイーストプレス）、『ビューティフルキエメント 幸せのきずな』（リーブル出版）など。また出版プロデュース作品として『生きる 義家弘介』（スターツ出版）、『デキる社員』『狂食ギャル』（共にイーストプレス）など多数。